

9月17日礼拝説教 コロサイ3:12～17 隅野徹師

今回私にもっとも迫ってきたのは16節です。ここでは「キリストの言葉が、自分の中で豊かに宿るように」という勧めと「知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩編と賛歌と霊的な歌によって、心から神をほめたたえなさい」という別の勧めがあるように見えますが、ここも原語に忠実に訳すならば、少しニュアンスが変わって見えます。前半は「キリストの言葉が、あなたたちの中に豊かに住み込むようにしなさい」という風に訳せるそうです。ただキリストの言葉が「心の中にある」というのではなく「住み込むように」ということを教えているのです。つまり、キリストの言葉、聖書の教えをただ「知っている、記憶している」のではなく、その言葉や教えが「実生活」の中に生かされているということが教えられているのです。

御言葉が住み込むというのは、暗記している、詰め込んでいるというより「実生活の中で生きている、生かされている」ということです。そのことを証しするのが、16節の次の言葉です。原語に忠実に訳するならば「お互いに、あらゆる知恵によって教えて論し」となるそうです。つまり「御言葉が自分の中に住み込むようにする」ことをうけて「あらゆる知恵によって教え論す」ということが出るのであります。あらゆる知恵とは、私はとくに「人生の中での経験、社会での経験」を指すのだと感じています。

これまでに読んできた、また聞いてきた聖書全体の教え、神の愛が「人生の経験」とプラスされることで、人を論し、愛をもって教えることができるようになるのではないのでしょうか。皆さんもそれぞれ、かけがえのないご経験をなさっている方ばかりです。そのご経験と聖書の教えを重ねることで「隣人や近い人を論し、愛をもって教える」ことができると信じています。パウロがこの箇所では教える「愛の実践」とは、「自分らしく自然体でできることだ」ということをぜひ覚えていただいたら幸いです。(終)